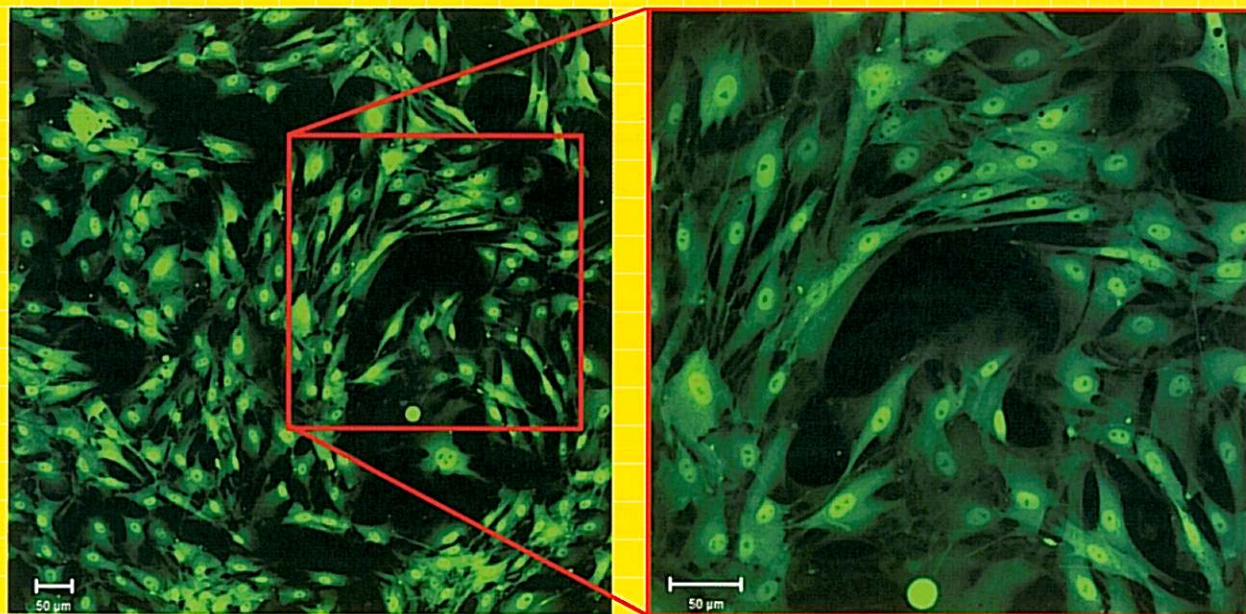


日本歯科評論 11

THE NIPPON DENTAL REVIEW

November 2011 No.829 Vol.71(11)



日本歯科大学新潟生命歯学部 歯周病学講座
岡角祐子先生・清水 豊先生・佐藤 聡先生 <私の研究室から>本文9頁

〈特集〉

続 う蝕治療を見直す——接着修復の視点から

福島正義・桃井保子・富士谷盛興・千田 彰・二階堂 徹・高垣智博

・田上順次・林 美加子・久保至誠・今里 聡・清水明彦

総合治療を目標にした歯科臨床 3・完

新井俊樹

“DH”あなたの出番です!

歯周治療におけるプラークコントロールの効果的な進め方

小野寺美穂・吉田拓志

【Prof. ITO の歯周病学講座】プラークコントロールの基本テクニック

伊藤公一

HYORON

<http://www.hyoron.co.jp>

直感力とクリティカルシンキングのバランス

なかはら えつ お
中原 悦夫

医療法人社団協立歯科 クリニック デュボワ
〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-1-1 帝国ホテルプラザ4階



20年ほど前、長野県で鉄砲水が発生し、多くの人の命が奪われたことを記憶しているだろうか。鉄砲水とは、ゲリラ豪雨に見舞われた上流から、濁流が下流を一気に襲う川原の津波のようなものだ。その当時、下流で溪流釣りを楽しんでいた1人の釣り人の話を、“3.11”の地震の際にも思い返していた。

いつもは深さ50センチくらいのところで岩魚が釣れるのに、その日に限って、いつもより1メートル以上も深い川底で岩魚が食いついてきたらしい。しかも釣った岩魚は皆、川底の石を大量にくわえていたという。異変を感じたその人は、一目散に高台まで駆け上った。直後、川原には鉄砲水が襲いかかり、九死に一生を得た。岩魚は鉄砲水が来ることを予知していて、流されないように石をくわえて川底に待機していたわけである。岩魚の予知能力もさることながら、その釣り人の鋭い直感力には度肝を抜かれた。

Decision-making

～好奇心は意思決定の引き金～

人は意思決定の連鎖で人生を切り開いている。論理的に時間をかけて意思決定に向かう時もあるれば、この釣り人のように直感的に瞬時に意思決定している時もある。

似通ったパターンで意思決定の連鎖を共有している人々は、やがてある種の同じような職業に辿り着く。学習と経験を繰り返しながら、あるいは何らかの社会的影響を受けながら、意思決定を積み重ねてきた結果である。さらに繰り返していくと、やがては、似た者同士が職業の枠を超えて集まってきていることに気づいたりもする。そんな時、人は天命や運命を感じたり、今風に言えば“DNAを感じたり”もする。

意思決定を誘導しているのはやはり好奇心である。あることへ興味を抱くこと自体、何らかの影響や誘導を受け、遺伝子に左右されているよ

うな気さえする。まるで自分ともう一人の自分が二人三脚で歩んでいるかのように……。

「時代の寵児」と呼ばれたソフトバンクの創業者、孫正義氏の意思決定も、無邪気な好奇心が常に引き金になっているようである。しかし、彼の場合は直感的な意思決定と同時に、すべてのストーリーが論理的に明確な脳内イメージに仕上がるまで、繰り返し念じ込んでいる。そして行動を起こす段階では、空間軸においても時間軸においても、そのストーリーは強烈かつ鮮明な動画イメージとして脳内に同居している。彼はソフト関連の出版事業からネット事業、さらに通信事業、そして震災直後には、ついにエネルギー事業参入をも決断した。異業界参入の際には常にその道では素人である。それはまさしく“感”じたら即“動”く姿勢の表れだ。だからこそ“感動”が生まれるのだろう。

最初は、単なる好奇心からの意思



決定かもしれない。しかしとにかく行動に出てみなければ、何もわからない。ただし、意思決定を成功に導くためには、それが明確かつ克明なクリティカルシンキングにより裏づけられている必要がある。

Critical thinking

～日本人の陥りやすい否定的思考と苦手な批判的思考～

クリティカルシンキングとは、物事を公正に判断するために“論理的かつ構造的に考える思考法”あるいは“批判的に角度を変えて検証する思考法”で、東洋人には苦手な思考法だと言われてきた。“批判的”と“否定的”の区別がつかず、“信頼”と“信用”を同じように扱ってしまいがちな点も特徴なのかもしれない。たとえば「ある人が仕事で失敗をしてしまった。その仕事における“信用”は失ったので同じ仕事はできないが、“信頼”は残っているので、別の仕事やプライベートではその人とお付き合いできる」。つまり「仕

事の問題は法廷で争いながら、プライベートでは一緒にゴルフができる」というのが西洋人、「一度仕事で裁判沙汰になれば、他の仕事はおろかプライベートの付き合いも、ましてや一緒にゴルフなんて考えられない」というのが東洋人、と説明するとわかりやすい。後者はまさしく“否定的”な思考法であり、“批判的”とは一線を画す。

批判的思考法とは「物事を公正に判断するため、真実を正確に明解に見定める努力」と、『実践！ クリティカル・シンキングのすすめ』の著者である八重垣 健氏（日本歯科大学教授）は定義する。これが歯科医療の診断とプランニングにおいて、きわめて重要な思考法であることは言うまでもない。しかし、行き過ぎるとEBM至上主義に陥ってしまい、さらに昨今のポピュリズム（大衆迎合主義）の影響が加わると、直感力のような“根拠を論理的に説明しづらい感性”を医療へ応用

することが完全に否定されてしまいかねない。その結果、西洋医学と代替医療という二極対立した医療の考え方を生み出したのではないか。

また日本では、医者も患者もおおむね同じ東洋人であるほか、クリティカルシンキングとは程違い診断やプランニングが見受けられる理由の1つには、診断を断片的に下しては処置をすることを繰り返す、長年にわたる日本医療の習慣が起因している。つまり、患者の現在の状態ですべてを判断し、患者の過去や10年後、20年後の将来をあまり視野に入れない、時間軸を考慮しない診断やプランニングが多いためである。

*

孫氏は自身の脳内イメージにおいて、空間軸と時間軸の中でクリティカルシンキングを繰り返し、論理的かつ直感的な判断から、やがて決断という意味決定を下すに至っている。しかし、この能力はすべての人に備わっているにもかかわらず、彼の突出している点は、常にその“強烈かつ繊細な創造力と持続力を駆使した明確なイメージを事前に完成させている”ことである。準備が整っているからこそ、チャンスのほうから近寄ってくるのだろう。その思考方法は成功の法則の断片を窺わせる。

多くの開業医は医師や歯科医師であると同時に経営を担う立場にあるが、決断はもとより、日々の診断にもこの脳内イメージの習慣は参考になるのではなかろうか。